

体験活動の及ぼす影響と今後の方向性に関する一考察

－「トライやる・ウィーク」等体験活動の成果と課題を踏まえて－

義務教育研修課 指導主事 東 智之

要 旨

体験活動は、子どもたちに自然への畏敬の念を培ったり、地域の人々との絆を深め、豊かな人間関係を築いたり、自己の存在感や有用性を実感させたりするなど大きな成果をあげている。研究にあたって、本県の取り組んでいる「トライやる・ウィーク」の成果と課題および全国で実施されている体験活動の取組内容について分析した。その結果、体験活動の日常の教育活動への発展、体験活動実施後の生徒の変容をよりよい方向に発展させていくための手立て、地域での体験活動の広がりとその支援のための方策等体験活動をさらに充実させるための課題が明らかになった。また、平成14年7月に設置された「体験活動ボランティア活動支援センター」の活動内容等からも体験活動の成果を継続・発展させるための重要な視点およびその方向性について考察した。

はじめに

本県では、阪神・淡路大震災、神戸市須磨区の事件から得た教訓に加え、最近のゲーム機器の普及に象徴される疑似体験の増加などにより子どもたちの直接体験が不足していることなどから、県下全公立小学校5年生を対象にした「自然学校」や全公立中学校2年生を対象にした「トライやる・ウィーク」などの体験活動をとおして、自ら学び、考え、判断する力、他者を思いやる心、豊かな人間性とたくましく生き抜く体力など、「生きる力」を育む教育を推進している。

特に、平成10年度から実施している「トライやる・ウィーク」については、県下全公立中学校2年生が対象であること、中学校で行われている他の体験活動に比べると1週間という長い期間であること、生徒の興味・関心にもとづく活動内容であることなど、全国に先駆けた取組として注目された事業である。

平成12年度に本県で実施した「体験活動全国フォーラム」(本県教育委員会、神戸市教育委員会、文部科学省共催)でも、2日間にわたり、延べ1,000名近い全国の教育関係者が体験活動について研究・協議を行った。このフォーラムで協議の中心となっていたことが、体験活動の内容の充実、実施後の定着・発展など、体験活動の継続性等の課題であった。

そこで、本研究では、本県の取り組んでいる「トライやる・ウィーク」の成果と課題および全国で実施されている体験活動の取組内容等の考察にもとづき、

1 体験活動をどのように日常の教育活動へ発展さ

せていくか。

2 体験活動実施後、生徒にどのような変容があるのか(進路選択、道徳性等)。また、それを持続、発展させていくためには、どのような手立てが必要か。

3 体験活動を地域へ広げていくために教育行政としてどのような支援ができるか。

など、体験活動の成果を継続・発展させるための視点および体験活動の今後の方向性について考察した。

1 体験活動をどのように日常の教育活動へ発展させていくか

「トライやる・ウィーク」に取り組んでいる本県でも、各学校でどのようにこの体験活動を日常の教育活動へつなげていくかが大きな課題となっている。

ここでは、学校内での取組と学校外での取組のふたつの側面から検討した。

(1) 日常的な教育活動の工夫・改善

① 個に応じた多様な教育の展開

体験活動の実施に向けた事前・事後の取組方法や内容を生かし、生徒の興味・関心に応じた学習活動を積極的に展開するとともに、「教」(おしえる)から「育」(はぐくむ)への指導の転換を図る。

② 指導方法の工夫・改善

校内の様々な学習活動において、社会人を外部講師として招聘する取組を進めたり、チーム・ティーチングの実施など指導方法の工夫・改善を図る。

③ 進路指導の改善

職場体験活動等をおとして、それまで教員からしか知り得なかった様々な職業を直接体験することにより、生徒自身が人間としての生き方・在り方を考え、自分の進路を考える機会となる。

さらに、教員にとっても様々な職種を理解することができ、進路指導の改善にも役立てることができる。平成13年度「トライやる・ウィーク」のまとめには、次のような生徒たちの様子が報告されている。

- ・将来、自分の就きたい職業等について進路相談に来る生徒が増えた。
- ・福祉関係の場で体験し、進学先についてもその方向に進んだ生徒がいた。
- ・地場産業を体験したことで、その素晴らしさに気付き、自分の町の産業に誇りを持つようになった。
- ・自分の意志で主体的に進路先を決定する生徒が増えている。

(2) 完全学校週5日制に対応した取組の発展

① 地域社会での活動場所づくり

「トライやる・ウィーク」では、5日間の活動だけではなく、もっとやってみたいという感想をまとめた冊子等書いている生徒も多い。特に、ボランティア体験等では、土・日曜日に活動したいと考える生徒がいた場合、そのニーズに応じた活動場所や指導ボランティア等の体制を整えておく必要がある。

② 継続した長期の活動の保障

生徒がさらに長期間にわたって活動を続けたいと思った場合に、そのニーズに応じた活動場所や指導ボランティア等の体制を作る必要がある。

特に、中学生にとってスポーツ活動はもっとも興味・関心が高いと思われる（「トライやる・ウィーク」では、スポーツの分野での活動は少なかった）。現在、学校教育が担っている部活動と社会体育との関係や、社会人の活用方策などを整備することにより、スポーツの分野でも継続した活動が可能になる。

③ 学校・家庭・地域社会の連携

何よりも大切なことは、学校・家庭・地域社会の三者の連携である。体験活動は、学校だけが行うものではない。例えば、長期休業中などに中学生を地域のリーダーとして、子ども会活動や地域行事の企画・運営を任せるような体制を整えていくことにより「地域の子

どもは地域で育てる」環境が築かれていく。

そこで、地域における子どもたちの居場所づくりに関する提案として、

- ア 体験活動等に協力していただいた人材を外部講師として活用する。
- イ 市郡町での小・中学校の共通の人材として人材バンクを整備する。
- ウ 活動場所を「総合的な学習の時間」等の地域活動の拠点として活用する。
- エ 本県であれば、「スポーツクラブ21ひょうご」や「ふるさと文化再発見アクションプラン」、「ウィークエンド・子どもいきいき体験事業」など、他の事業との連携を図ることの4点をあげたい。

(3) 体験活動を日常の教育活動へ発展させている取組事例

では、実際に各学校ではどのような取組が行われているのか、本県での取組事例を紹介したい。

① 学校行事の工夫

ア オープンスクールの実施

1週間あるいは1ヶ月の長期にわたって学校開放を行い、期間中、保護者や地域の方々が自由に授業の様子等を参観できるオープンスクールを実施している学校がある。このオープンスクールは、開かれた学校づくりにつながる取組であり、「トライやる・ウィーク」をおとしてできた学校・家庭・地域社会の連携をさらに拡充する取組である。

イ 「ONE・DAYトライやる」の実施

土曜日に地域の方々から様々な遊びや伝統芸能等を指導していただく「ONE・DAYトライやる」を実施している学校もある。この取組は、学校完全週5日制に対応した取組や継続した長期の活動として広がり期待できる。

② 「総合的な学習の時間」等における取組

ア 福祉、ボランティア関連事業所と連携した福祉体験学習の実施

イ 「トライやる・ウィーク」を指導していただいた受入先の方などを招いた進路学習会の実施

ウ 一流の職業人を招いた講演会の実施（マイスター講演会）

上記の取組は、いずれも「トライやる・ウィーク」でできた受入先との関係を発展させ、校内の様々な学

習活動において社会人を外部講師として招聘する具体的な取組である。これらの取組は、指導方法の工夫・改善の点からも評価できる。

③ 地域での活動

ア 地域でのボランティア活動の実施

地域の要請で生徒たちが田植えのボランティアを行ったり、生徒会が中心となった自主的な地域のクリーン作戦の実施や福祉施設等への訪問を行ったりしている学校もある。地域社会での活動の広がりが期待できる取組である。

イ 地域行事の企画・運営

ニュースポーツ大会や地域の盆踊り大会などで、企画段階から生徒たちを参加させ、生徒の意見を取り入れた企画・運営を行っている地域も増えてきている。

「地域の子どもは地域で育てる」ことの具体策として広がりが期待できる。

2 体験活動は、生徒にどのような変容をもたらしたか

平成10年度に当所、心の教育総合センターが「トライやる・ウィーク」の実施前と実施後における生徒の心の変化に関する調査（平成10年度当所研究紀要第110集P35,36参照）を実施した。この調査では、連続5日間の活動において同一の活動を継続して体験した生徒と複数の活動を体験した生徒を比べると、前者のほうに高い効果が見られるという結果が得られた。

さらに、受入先からは、3日目までは挨拶の声も小さいが、4日目ぐらいから大きな声で挨拶ができるようになるという、活動中の生徒の変容を多く聞く。本当の意味で、自分で考えて行動しようという姿が見られるようになるためには、連続5日間という体験活動の期間が必要である。

図1、2、3は、平成14年度に「トライやる・ウィーク」評価検証委員会が県下の高校1年生から3年生までを対象に行ったアンケートの結果である。

「トライやる・ウィーク」は、中学校2年生で体験するので、高校3年生にとっては5年前のことになるが、図1を見ると、6割近い生徒が自分の考えや行動に影響があったと思うと答えている。つまり、価値ある体験活動は長く生徒の心に残り、その後の考えや行動に深い影響を及ぼすと考えられる。したがって、体

験活動の内容をより一層充実させる取組が重要となる。

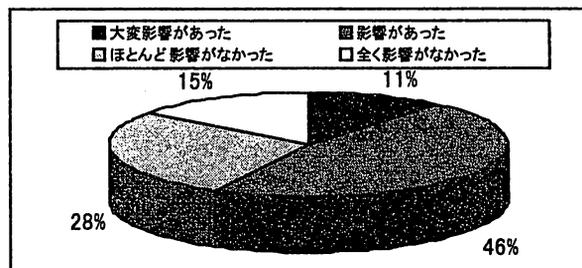


図1 「トライやる・ウィーク」に参加して、自分の考えや行動に影響があったと思いますか。
（「トライやる・ウィーク」評価検証委員会資料より）

図2では、9割以上の生徒が学校では学べなかった体験ができたと答えている。また、「トライやる・ウィーク」を体験する中で6割以上の生徒が感動することがあったと答えている。

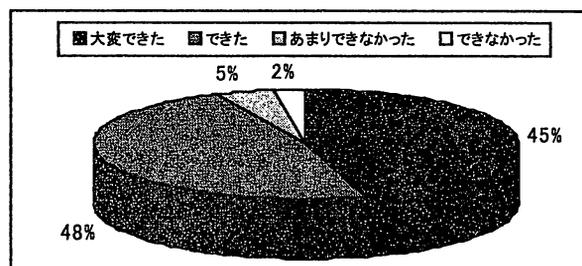


図2 「トライやる・ウィーク」では、学校では学べなかったことが体験できましたか。
（「トライやる・ウィーク」評価検証委員会資料より）

一方、図3を見ると、知り合った人たちと活動終了後によく挨拶をするようになった生徒は3割しかいない。これは、生徒たちが「トライやる・ウィーク」をとおして得た貴重な体験を、学校やその後の生活のなかで継続・発展させることができていない結果と考えられる。体験活動が学校内での新たな取組によって継続・発展することはもとより、家庭や地域においても体験活動が継続・発展することが望まれる。

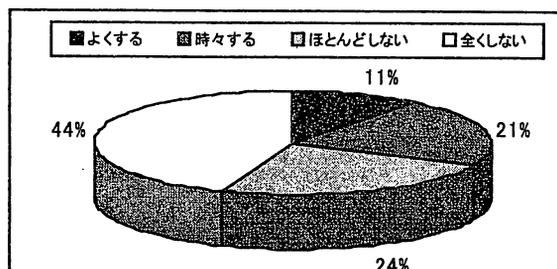


図3 「トライやる・ウィーク」をきっかけに知り合った人たちと挨拶するようになりましたか。
（「トライやる・ウィーク」評価検証委員会資料より）

3 体験活動の充実・発展のために必要な取組

まず、「体験活動全国フォーラム」でも課題となっていた体験活動の内容の充実について考察する。体験活動は、どのような内容であっても生徒たちにとって実り多い体験となるとは限らない。体験活動の内容自体が生徒たちにとって感動を体験できるようなものでなければ、体験活動をやってよかったと思わないし、同じような活動を続けてやってみたいと思わないと考える。

では、体験活動の内容の充実・発展のためには、どのような取組が必要なのか。

(1) 内容充実のための視点

平成12年11月に実施された「体験活動全国フォーラム」では、体験活動を充実・発展させるために、表2にある活動内容の充実のための視点が提案された。

表2 体験活動を発展させるために必要な視点
◇5つのS（活動内容の充実のための視点）

サポート	Support	・支援する体制、組織
シンプル	Simple	・明確な目的、ねらい
スペース	Space	・実施する空間、場所
セレクト	Select	・自らが選択できる余地
ソウル	Soul	・魂を揺さぶる本物

（平成12年11月「体験活動全国フォーラム」で提案）

この5つのSは、生徒の活動を支援するための体制、組織は言うまでもないが、本物との出会いや生徒自らが活動内容を選べる点も含んでいる。これらの視点をきちんと押さえて活動内容の充実を目指すことにより、体験活動が生徒たちにとって充実したものとなり、またやってみたいという継続への意欲付けもできると考えられる。

(2) 「トライやる・ウィーク」のアンケートに見る取組のヒント

本県では、「トライやる・ウィーク」実施後に活動に参加した生徒だけでなく、保護者や活動場所の関係者や指導していただいた指導ボランティアの方々、教職員に対して、毎年度、アンケートを実施している。

このアンケートの結果にも、充実・発展のヒントがある。

① 生徒アンケートより

〔質問項目〕

- ・自分の取り組む活動について、事前、期間中に家庭

で話し合いましたか。

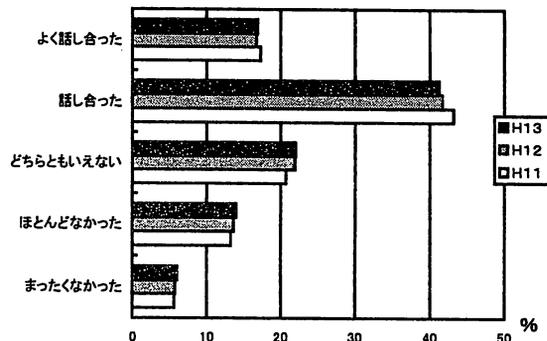


図4 県教育委員会 実施後アンケート結果(生徒)より

図4に見られるように、20%近い生徒が家庭で話し合わなかったと答えている。生徒アンケートのなかで、この項目だけが他の項目に比べて否定的な意見のポイントが高い（他の項目の否定的な意見は、多くて5%）。さらに、年度を経るごとにわずかではあるが増している。これは、体験活動が行事化することにより、家庭で話題になることが少なくなると考えられる。

普段、家では、ほとんど話さない生徒でも、「トライやる・ウィーク」実施期間中には、自分の体験を誰かに聞いて欲しくなり、夕食の時に食卓にいる家族に自らの体験を一生懸命話したというエピソードも多々ある。この時、誰にも話を聞いてもらえなかったとしたら、自らが体験したことの感動はそこで終わってしまう。短い言葉でも保護者が受け止め、返してやることで、さらに体験が充実し感動が大きくなる。

各学校で保護者の理解と協力を得るための取組、広報活動をもう一度見直し、保護者の役割をしっかりと認識してもらう必要がある。

② 保護者アンケートより

〔質問項目〕

- ・「トライやる・ウィーク」のような機会があれば、また参加させたいと思われませんか。

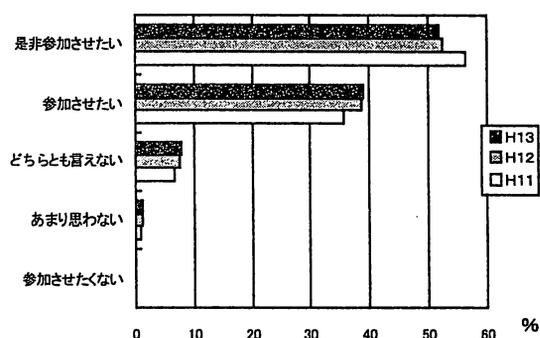


図5 県教育委員会 実施後アンケート結果(保護者)より

図5を見ると、90%の保護者が、「トライやる・ウィーク」のような体験活動の機会があれば生徒を参加させたいと答えている。

このような保護者のニーズを考えると、「トライやる・ウィーク」実施後も各学校で様々な形で体験活動を継続することが期待される。

生徒たちが学校外にも学びの場があることを「トライやる・ウィーク」の活動をとおして発見したことは大変大きな意義がある。1週間に限らず様々な体験活動が実施できる場や機会を提供することは、生徒たちに「生きる力」を育むうえでも極めて重要である。

③ 関係者アンケートより

〔質問項目〕

- ・あなたは、「トライやる・ウィーク」について、どのようにお知りになりましたか。

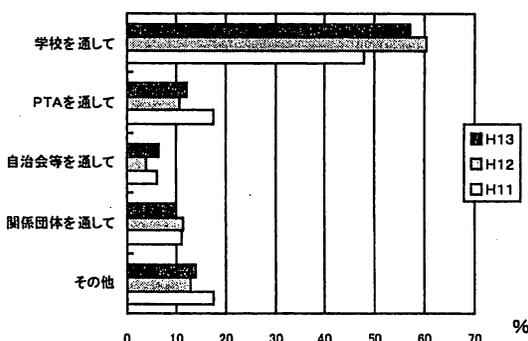


図6 県教育委員会 実施後アンケート結果(関係者)より

図6は、「トライやる・ウィーク」をはじめて受け入れるにあたって、受入先にどこから情報が発信されたかの結果である。「学校を通して」と答えた割合が平成11年度に比べ平成13年度は10%以上も増えている。

「トライやる・ウィーク」の実施をとおして、地域と学校の距離が縮まり、学校からの依頼だけでも十分受入先が確保できるようになってきたと受け取ることもできるが、「地域の子どもは地域で育てる」という地域への広がり考えた場合には、事業実施にあたって学校・家庭・地域社会の役割分担をしっかりと確認し、共通理解しておく必要がある。

学校内、学校外の取組がうまくつながってこそ「トライやる・ウィーク」の成果が生かされる。学校の中での取組は勿論であるが、「トライやる・ウィーク」によって生まれた「交流」を土・日曜日や長期休業中にも生徒の自主的な活動として継続、発展させることが「トライやる・ウィーク」の取組を学校行事という

狭い範囲のなかだけの取組にしないためにも重要である。

④ 教職員アンケートから

〔質問項目〕

- ・この1週間で、生徒たちに変化が見られましたか。

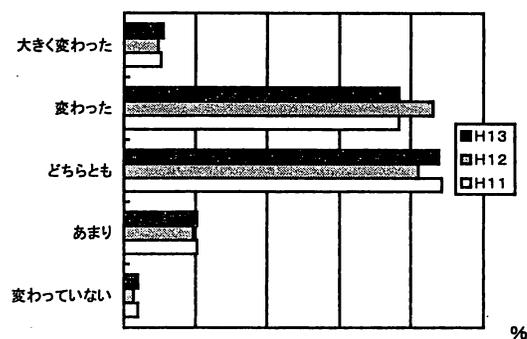


図7 県教育委員会 実施後アンケート結果(教職員)より

図7では、生徒たちが変わったという教職員も一定数あるが、40%以上の教職員が、「どちらとも言えない」と答えている。これは、「トライやる・ウィーク」実施期間中に見られた生徒たちの変容が、その後の学校生活の中に、なかなか反映されてこないという思い、ジレンマのあらわれではないだろうか。「あれだけ、事業所で一生懸命掃除をしていた生徒が、学校へ戻ってきた途端、また、元のように掃除を怠けている。あの1週間は何だったのだろう」という教職員の声も聞く。関連した項目では、「トライやる・ウィーク」が教育活動を考える契機となりましたかという質問に対して、半数の教職員は「概ねなった」と答えているが、30%近い教職員は「どちらとも言えない」と答えている。

つまり、「トライやる・ウィーク」を核とし、学校内での事前・事後の取組がつながって、はじめて生徒たちの変化が実感できる取組へと発展するのである。「トライやる・ウィーク」を実施したからといって、学校自体が従来と変わらない取組を続けていては、その成果を充実・発展させる取組にはつながらない。

ここで、「トライやる・ウィーク」実施後のアンケートを参考に、体験活動をより充実・発展させるための取組をまとめると次のようになる。

- ① 保護者の理解と協力を得るための取組、広報活動
- ② 様々な体験活動を実施できる場や機会の提供
- ③ 学校・家庭・地域社会の役割分担の確認、共通理解
- ④ 体験活動の事前・事後の取組の充実

(3) 全国的な体験活動の実施状況に見る取組のヒント
次に、「トライやる・ウィーク」が契機となり、全国で様々な体験活動が実施されているが、各都道府県等で行われている事業を調査し、その中から、体験活動をより充実・発展させるために参考となる取組を探ってみた。

以下は、全国で実施されている中学校の体験活動を

ア 自然体験・生活体験活動を中心とした事業

イ 社会体験活動を中心とした事業

ウ 地域との連携、特色ある学校づくりを中心とした事業

の3つに分類し整理したものである。

① 全国的な体験活動の実施状況（中学校のみ）

ア 自然体験・生活体験活動を中心とした事業

北海道	地域教育推進事業 心の体験ウィーク	岐阜	冒険プログラム
岩手	豊かな心をはぐくむ 教育推進事業	滋賀	ふれあい瞳かがやく 体験事業
長野	ふれあい自然体験活 動推進事業	広島	体験活動ウィーク推 進モデル支援事業

イ 社会体験活動を中心とした事業

宮城	心をはぐくむ学校教 育充実事業	京都	中学生のこころ生き 生き体験活動
茨城	中学生社会体験事業	兵庫	地域に学ぶ「トライ やる・ウィーク」
栃木	マイチャレンジ推進 事業	奈良	いきいき・なら体験 事業
群馬	ぐんまチャレンジウィ ーク	鳥取	地域に学ぶ「ワクワ クとっとり」
埼玉	中学生社会体験チャ レンジ事業	岡山	チャレンジワーク14
千葉	中学生社会体験学習 モデル事業	広島	体験活動ウィーク推 進モデル支援事業
富山	社会に学ぶ「14歳 の挑戦」	山口	チャレンジ体験学習 先行モデル支援事業
石川	地域と共に「わく・ ワーク体験」	愛媛	3(スリー)出会いウィ ーク
福井	中学生社会体験活動 推進事業	高知	わくわくチャレンジ inすさき(須崎市)

ウ 地域との連携、特色ある学校づくりを中心とした事業

秋田	ふるさとドリームア ップ事業	愛知	夢が語り合える学校 づくり推進事業
山形	地域の学校づくり推 進事業	島根	21しまねっ子のびの び事業
神奈川	地域との協働による 学校づくり	福岡	やるキッズ育成支援 事業
静岡	スクールフロンティア 推進事業	大分	大分っ子わくわく体 験推進事業

以上は、全国で実施されている中学校での体験活動をインターネットのウェブページをもとに調べたものである。なお、小学校についても同様の調査を行った。

全国的な体験活動の実施状況を調査した結果、体験活動に係る事業に関して次の3つの傾向が分かった。

- ・小学校での社会体験活動の実施は少なく、中学校での実施が圧倒的に多い。
- ・中学校では、自然体験・生活体験を中心とした事業は、社会体験活動に比べると少ない。
- ・小、中学校とも地域との連携、特色ある学校づくりを中心とした事業が増えてきている。

② 体験活動をより充実・発展させるための取組に参考となる事例

次に、全国を取組の中から体験活動を充実・発展させるために、特に参考となる取組を紹介する。

ア 秋田県：ふるさとドリームアップ事業

ふるさと（地域）をテーマに、特色ある学校づくりに結びつく体験活動を児童生徒が主体的に計画し実施する事業である。県内全ての小・中学校（466校）が実施対象である点は、体験活動を充実・発展させる取組を考えるうえで参考となる。

イ 愛知県：夢が語り合える学校づくり推進事業

児童生徒の発想にもとづく創意工夫ある教育活動、地域の特性を生かした学校づくりを推進する事業である。実施対象に幼稚園が入っているところが注目に値する。体験活動を充実・発展させるためには、幼稚園・小学校・中学校の連携を視野に入れ、発達段階等を考慮した体験活動の縦の広がりが必要である。

ウ 福岡県：やるキッズ育成支援事業

子どもたち自身による目標設定や興味・関心に応じた主体的な活動、取組を支援する事業である。体験活動を学校から地域へ広げていく取組である点が注目に値する。体験活動の実施においては、この横への広がりも重要である。

これらの全国的な体験活動の実施状況や取組を参考に、体験活動をより充実・発展させるための取組をまとめると次のようになる。

- | |
|------------------------|
| ① 全ての学校を事業実施の対象とする。 |
| ② 発達段階に応じた体験活動を実施する。 |
| ③ 生涯学習関連事業との効果的な連携を図る。 |

4 今後、求められる教育委員会の機能・役割

(1) 「体験活動全国フォーラム」から考える

平成12年に開催された「体験活動全国フォーラム」は、体験活動の推進方策や「地域の子どもは地域で育てる」ための具体的な方策等について、全国的規模で意見交換を行うために開催されたものである。

全国レベルのフォーラムは開催が難しいかもしれないが、都道府県レベルでは、それぞれの市町村で実施している様々な体験活動に関する情報交換の場を設定することは可能であろうし大変重要である。体験活動に取り組んでいる様々な団体等（教育関係者ばかりでない）が情報を交換する場、情報を発信する場としてのフォーラムは、取組を地域へ広げていくために重要な役割を担う。

(2) 「体験活動ボランティア活動支援センター」から考える

次に、平成14年7月に設置された、「全国体験活動ボランティア活動支援センター」と都道府県・市町村の「体験活動ボランティア活動支援センター」の活動について検証する。

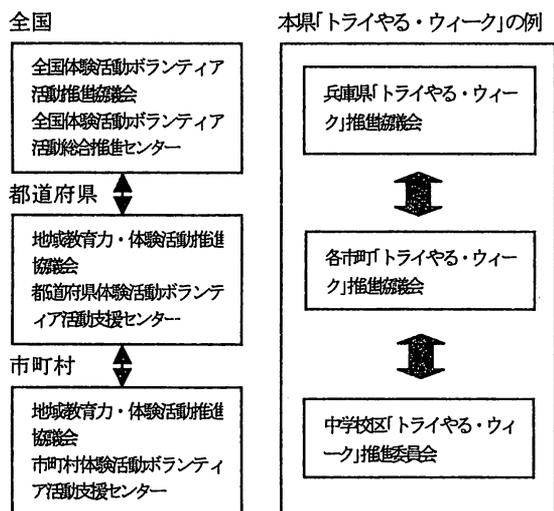


図8 「体験活動ボランティア活動支援センター」の組織と本県「トライやる・ウィーク」の推進組織

図8の組織を比較すると、都道府県・市町村の各段階における協議会、委員会の部分は、教育委員会のみならず他部局との連携も意識し、官民一体となった組織である点は「トライやる・ウィーク」の推進組織と共通している。

さらに、「体験活動ボランティア活動支援センター」の体験活動をコーディネートする役割についても、「トライやる・ウィーク」の中学校区推進委員会の役割と共通点が多い。

つまり、「トライやる・ウィーク」が大きな成果をあげているという実績等から考えると、①都道府県・市町村段階での官民一体となった推進組織の確立、②体験活動実施に係る相談、③体験活動に係る情報提供、④希望する体験活動をコーディネートする役割等が教育委員会に求められる重要な機能・役割である。

(3) 重要な機能・役割は、5つのM

実際に地域で体験活動を推進しようとする場合、誰もがやりたいと思わなければ何事も始まらない。まず、やってみようという雰囲気づくりを行い、体験活動の目的や企画の意図を広報することが重要である。

次に、体験活動をやってみたいと思う人に対して、どんなことができるのかという情報を提供したり、相談できる窓口をつくっておくことが必要になる。

さらに、実際にやってみたい人と受け入れる側との調整も必要になる。やれば終わりではなく、新たな取組の評価を行い、常に取組自体の見直しを図っていくことも忘れてはならない。

これらの体験活動の実施において教育委員会に求められる機能・役割を整理すると、表3のようになる。

表3 体験活動の実施で教育委員会に求められる機能・役割

Manager	マネージャー
体験活動を実施する場合の、コーディネート、マネジメントをする。	
Mixer	ミキサー
体験活動を実施する場所、時間、人物等をまとめ、調整していく。	
Mood maker	ムードメーカー
体験活動をやってみようという雰囲気をつくっていく。	
Messenger	メッセンジャー
体験活動の目的、ねらいや企画の意図・思いを伝える。	
Monitor	モニター
新たな取組の評価を行い、常に事業や支援体制の見直しを図っていく。	

ここに示した5つのMは、教育委員会の取組を改善していく視点とも言える。

5 今後の体験活動の目指すべき方向

「トライやる・ウィーク」などの様々な体験活動の取組は、年数、回数を重ねることでよりスムーズに実施できる反面、その体験活動が本来、何を目的として実施されてきたのかというねらいの部分が忘れられる

傾向はないだろうか。常に発展し続ける体験活動となっているかどうか、体験活動の方向性もしっかりと押さえたうえで取組を重ねていくことが重要である。

ここでは、体験活動の目指すべき方向性について述べ、本研究のまとめとしたい。

まず、体験活動の目指すべき方向性として、活動自体の広がりを3段階に分け、表4に示した。

表4 方向性その1

① 地域を学ぶ	・地域の歴史、文化、伝統等を学ぶ。 《地域素材等を活用した学校内での学び》
② 地域で学ぶ	・地域での様々な体験活動によって学ぶ。 《地域を拠点とした学校外での学び》
③ 地域に学ぶ	・地域の人、もの、自然に学ぶ。 《学校・家庭・地域社会の連携による学び》 《学校内・学校外の学びの一体化》

体験活動の広がりを意識した場合、学校内での取組から学校外への取組へと広がり、さらには、学校内・学校外の取組が一体化した取組へと広がっていくことが重要である。したがって、「③地域に学ぶ」ところにまで取組を広げていくことが一番望ましい方向である。

次の図9に示すように、体験活動の目指す方向性として、学校・家庭・地域社会の連携がより深まるということをあげたい。

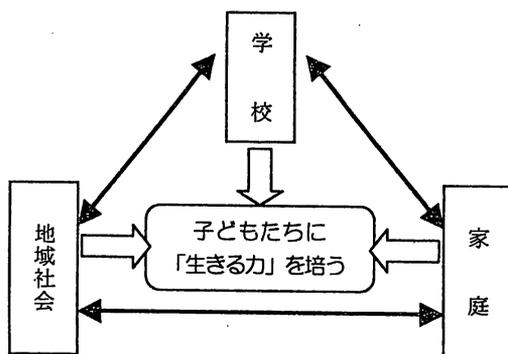


図9 方向性その2

体験活動を核に、子どもたちに「生きる力」を育むためには、学校・家庭・地域社会の連携が必要不可欠である。つまり、体験活動を実施することにより、今まで以上に三者の連携が深まらなければ、本当の意味で価値ある体験活動とは言えない。

もうひとつの重要な方向性としては、図10に示すように「地域の子どもは地域で育てる」という地域づく

り・地域の活性化まで含めて、体験活動を捉えていくことである。体験活動によって、子どもたちが成長するとともに、学校・家庭・地域社会も成長することができるのである。

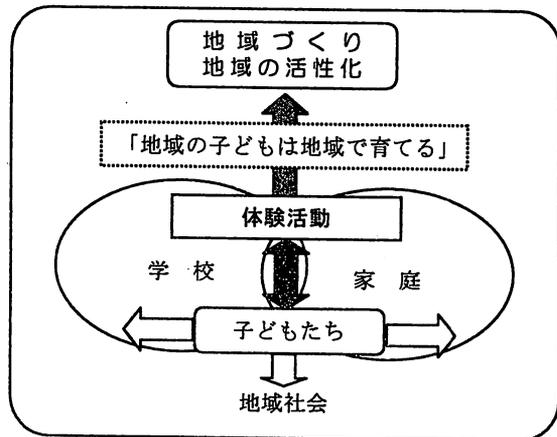


図10 方向性その3

おわりに

図6、図7の説明の部分で紹介した「トライやる・ウィーク」評価検証委員会でも様々な改善策を検討している。中学2年生を対象にした1週間の体験活動に加え、平成15年度からは、対象を中学生全体に拡大することにしている。学校が休みの週末や夏休み中に、中学生と住民が互いに出し合ったアイデアにもとづいて地域活動を行うという取組で、10中学校区をモデル地区に指定し、平成16年度以降、全県に広げていくことが予定されている。さらに、それぞれのモデル地区での取組を報告するフォーラムも計画されている。

最後に、平成10年度に「トライやる・ウィーク」を実施し、全国に体験活動の大きな波をつくっていった本県教育委員会は、今後、更なる体験活動の充実に向けた取組を全国へ発信していくことが期待されている。

〈参考文献等〉

- ・「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』のまとめ」本県教育委員会（1999～2001）
- ・高橋史朗編『心を育てる学級経営別冊No.185感性・心の教育』明治図書（2000）
- ・宮原 修編『特色ある学校をつくる』ぎょうせい（2000）
- ・長沼 豊編『子どもの奉仕活動・ボランティア活動をどう進めるか』教育開発研究所（2002）